

羽茂高校創立の周辺

……歴史の流れのなかで……

菊 地 一 郎

今や高校進学率は97.8%、大学進学率55.3%の時代である①。このような中で、わが羽茂高校は過疎と少子化の影響をまともに受け、存立の危機をむかえようとしている。そこで近代日本歴史のなか、佐渡羽茂で何故、中等学校の設置が望まれたか当時の状況、さらに創立を成功させた先人の熱意と厳しい決意を知り、羽茂高校存続、発展に資するため、今私たちに何ができるかを考える基にしたい。

I 創立前の近代日本

明治維新後、先進国ことにドイツを見ならっての富国強兵、殖産興業策の推進は一方で自由民権運動の弾圧、絶対君主制の大日本帝国憲法（欽定憲法①）を1889（明治22）年に発布。また資本主義経済の発展は産業構造を第一次産業から第二・三次産業へ移行し、農村から都市にどんどん労働者・人口が移動した。資本主義経済は当然、利益追求をする、大量の商品生産を進め、一方、人件費を含むコスト削減を行う。結果として人々が低所得のため消費はふるわず、生産過剰となり、価格暴落、破産、失業などがおこり、景気循環の波は最悪の恐慌となるのである。イギリスでは産業革命後の1825（文政8）年世界最初の恐慌がおこった。遅れて資本主義国になった国も例外はなく、その後約10年（ジュグラの波②）ごとに世界同時に恐慌がおこっている。わが国も先進国と同様に、1900（明治33）年からその恐慌が始まった。

こころよく

我にはたらく仕事あれ

それを仕遂げて死なむと思ふ

はたらけど

はたらけど猶わが生活楽にならざり

じっと手を見る

これは啄木の『一握の砂』に載っている短歌で、1908（明治41）年北海道から上京して、1910（明治43）年歌集刊行の年に詠ったものである。（1907年わが国では2回目の恐慌がおこっている。）資本主義の発展は資本家階級に対抗する立場から労働運動がおこり社会主義政党が結成された。また為政者は絶対天皇制の推進のため、ことに日露戦争など戦争反対運動した社会主義者の思想弾圧は熾烈を極めた。政府指導ででっちあげられた1910（明治43）年の大逆事件③（幸徳事件）などは一つの歴史的汚点である。啄木ではないが閉塞の時代だったのである。

1912年明治から大正に代わり、あとで大正デモクラシーと言われた時代ではあるが、

明治憲法下であれば人権は制限つきであることに変わりはない。第一次世界大戦、1914（大正3）年～17（大正6）年は大戦景気で輸出額が輸入額を上回り、債務国から債権国へ、船成金など成金が続出した。戦勝国（山東省の権益、パラオ・マーシャル諸島等の南洋諸島の委任統治領、国際連盟の常任理事国）としての権益ばかりでなく、経済不況と財政危機をいっきょに解消した。工業が発展し生産額で農業を追い越し、全産業生産総額の半分以上をしめるまでになった。人口の都市集中度が高まり第三次産業が発達した。しかしそれは経済格差をうむ。1914（大正3）年の工業労働者は109万人だったが1919（大正8）年には178万人になった。当時、河上肇④は『貧乏物語』で資本主義では貧乏人がうまれることを指摘し、その根絶に奢侈の廃止と社会政策と社会主義をあげている。

わき道にそれるが松方孝次郎の松方コレクション（国立西洋美術館）、大原孫三郎の大原社会問題研究所、大原美術館（日本最初の西洋美術館）のコレクションなどは円高による成果だと言われているし、『ワイマール期ベルリンの日本人』によると明治政府以降ドイツに見習うことが多かっただけに、この頃の文部省在外研究員の派遣先はドイツが飛び抜けて多かった。それはこのドイツ・マルクの暴落も一つの要因だったと思われる。当時、日本人は「ドイツ語学校の中心勢力」になっていた。またこの円高は美術品購入と同じように、社会科学研究のため、古本屋の蔵書を丸ごと買い求めており、そして今は東大、大原社会問題研究所など大学図書館の蔵書となっている。社会科学研究にはロシア革命もまたわが国に大きな影響をあたえた。マルクス主義・社会主義研究は第二次大戦後を含め、この頃の留学生が中心になった⑤。

1918（大正7）年から1920（大正9）年にかけて米価が暴騰し米騒動が起り、1920（大正9）年には戦後恐慌がおこった。そのゆがみが大正から昭和に入る前後から極端に吹き出たように思う。元号が昭和に変わって1年もたたない1927（昭和2）年3月、銀行の休業や閉鎖が始まり取り付け騒ぎがおこった。金融恐慌の始まりである。一方思想弾圧目的に制定した治安維持法は1928（昭和3）年にはいると共産黨員一斉検挙（3・15事件）をおこない日本労働組合評議会などの関係団体を解散させた。1930年代後半になると自由主義・民主主義的思想・学問までも弾圧することになる⑥。

1930（昭和5）年になると前年10月24日〈暗黒の木曜日〉ニューヨークの株式市場大暴落に始まる世界恐慌の影響がわが国にもおし寄せ、いわゆる昭和恐慌がおこった。その年の1月、金輸出解禁をしたため、その不況と世界恐慌と二重の打撃をうけ深刻な経済状況におちいった。輸出は大きく減少し、正貨は大量に海外に流出して、倒産があいつぎ、賃金引き下げ、人員整理がおこなわれた。米価は1石26.60円から16.72円に暴落した（本邦米価年表・県知事官房統計課）。街には失業者があふれ、大学をでて30%しか就職できなく小津安二郎監督の「大学は出たけれど」と言う映画が話題に上ったのはこの頃である。さらに翌1931（昭和6）年からは冷害・凶作により農村の不況はさらに深刻になった（農業恐慌）。1934（昭和9）年はことに東北地方はひどく昭和の飢饉となり欠食児童や女子の身売りが続出した。岩手県小国村では米の収量が平年の12%しかとれなかった。それは翌年も続いた。借金の形に田畑を取られたり、税金を滞納して水田、畑、粃、馬、さらに時計、たんす、薪まで差し押さえられた例がある（日本残酷物語）。

II 明治以前の南佐渡

この日本の大きな流れのなか、わが南佐渡はどうであったろうか。かつて721（養老5）年、佐渡を3郡に分ち羽茂郡①ができた頃から一つの経済圏とまではいかないが、ささやかながら隣の集落との交流はあったのであろう。中世に至り羽茂の本間氏が支配していた頃、小木、赤泊にもいくつかの出城が築かれていたし、佐渡ではめずらしく大きな伽藍をもつ小比叡山なども羽茂の殿さまによって保護されていた。（江戸時代は御朱印寺であった。）ただ町村史には庶民の交流について羽茂の宮大工や小泊の石工の活躍など、わずかながら交流の記録が見える。

1589（天正17）年羽茂が落城し佐渡が上杉の支配下になった。1601（慶長6）年相川金山が発見され、1603（慶長8）年江戸幕府が開かれるとその後の佐渡はどんどん変わり、庶民の生活も大きく変化してくる。相川金山が盛んになり、また北前船、千石船②（佐渡では千石の船はなかった？）による産物の移出入がさかんになり、そしてそれまでの農・漁業の自給自足から金山稼ぎ松前稼ぎに変わってきた。

小木は佐渡が江戸幕府の直轄地となると代官が小木城に入り小木、羽茂、西三川などを支配する一方港町として栄えた。江戸時代初期の相川金山の金銀、資材、食料補給の廻船から、江戸後期になると相川、沢根あたりの廻船にかわって、宿根木の廻船が勢力をえ、御城米を大阪へ運んだ記録や、蝦夷地、松前・江差へ竹、わら、柿、栗などを積み売られた記録がのこっている。

小木はまた港町だけに元禄時代から飯盛女がいた。相川とならんで古い遊女とされている。1872（明治5）年人身売買禁止令、芸娼妓解放令がだされて娼妓は解放された。が更生策もないため生活ができない。それで翌年に貸座敷渡世規則、娼妓渡世規則がだされた。自由意志で営業を希望する娼妓に場所を貸すという名目である。結局、小木では船宿も貸座敷と名前をかえて娼妓の営業は復活した。町史によれば貧困、無頼の女が養女として小木に流れ込んできた③が「小木町では娼妓をけいべつするなどということはありません。それどころか、この女たちが小木町の繁栄をつくり出してくれていると考えるのです。〈略〉小木では男の児をきらい、女児が生まれると大いによるこびます。そして、小学校へいく前からおけさを教え、追分を習わせます」とある。小木ではよく男千両女万両と言われたが、男より女の方が働きがあったのである。

赤泊も港として栄えた。江戸時代にはいって佐渡の玄関口は松ヶ崎から小木港や赤泊港に変わった。村史によれば、上浦あたりに廻船の船主ばかりか水主（カコ・一般船員）も多かったといわれる。北前船による繁栄と松前稼ぎで栄えた。また蝦夷地で成功し江差に顕彰碑が建立された者④や帰郷し私財を投入して赤泊港の基礎を築いた者などを輩出した⑤。

佐渡が金山関連産業で発展するなかで、羽茂は農業が主産業であっただけに落城してから、影がうすくなり社会から取り残された感がある。城主本間一族が亡び支配階級がいなくなり、大地主もいなく、自作農で貧富の差が少なく農業労働者、即ち小作のみでの生活者はいなかったのではないか。従って羽茂は階級意識が少なく敬語が少ないといわれている。1756（宝暦6）年奉行所の部外秘密文書であった『佐渡四民風俗』（高田備寛編輯）⑥に「羽茂本郷は土地宜しく、五穀豊熟の年多く候故自然と人気壯なる風俗、其の上耕作の外女は布木綿を織り、男は蘆苧（ゴザ）等多く織り出し、或は身元宜しき者は菅原の社僧に便（タヨ）り候て連歌を興行し、又は此の郷に名を残し候一破（波）流の剣術を修練の者数多くこれ有り

至って健やかなる人柄の所に御座候。然上支配の役柄より籠骨（ソコツ）の事など万一申し掛け候ては一向これを用いず党を成し候て其の非を挫き候程の強精にて奸邪の徒にはこれ無き由承り及び候。此所川魚の獵これ有り且又羽茂太郎と申す事、久知次郎八幡三郎畑四郎など何れも土地を称ふる民間の諺にて御座候。」とある。連歌など盛んであったが、生活は相も変わらず自給自足で歴史の表に顔をだすことはなかった。

この文章を読むと、いかにも豊かな暮らしであって、正邪にたいし見識をもっていたように思える。しかし、凶作の年でも年貢は取り立てられ、米納のため重立の百姓や、5人組、親戚等の援助でどうにか上納し年を越したのである。佐渡でもよく飢饉はあった。羽茂は五穀豊熟の年多くと記されているが、日頃は粗食であった。米1割も入っていない糧飯が常食であった。勤儉貯蓄して、不作や災害などに控え安定した生活や財産を得たい家ほど節約し粗食を美德としたようだ。長生の村といわれながら明治中頃まで平均寿命42歳であった。

佐渡奉行は260余年の間に102人の交替があった。それだけに功を急ぎ、冷酷な施政が多く、温情に欠けるといわれる。佐渡は年貢の外に遠くに米を送ると減ると言って差米を加えさせ、鼠が食う分も必要だと追加させるなど、さまざまな名義で課税された。徳川家康の施政方針「人民は生かすべからず、殺すべからず」そのもので、幕府の悪政は、生かさず殺さず。農民の素朴と無知の暮らしの犠牲のうえに成り立っていたのである。それが幕末に至り、1838（天保9）年幕府の年貢の取り立て方の抵抗に始まった「佐渡一国騒動」の首謀者・義民中川善兵衛⑦の事件は、徳川政治の矛盾に対し佐渡農民の反抗、正義の戦いとして歴史にとどめる。また羽茂稲扱の氏江元彦⑧、漢方医葛西周徳が出たことは、明治へのいぶきが感じられる。

Ⅲ 明治以降の羽茂

明治になると世の中は大きく変わるのであるが、産業面から、とくに羽茂にとっては味噌産業の発展は大きい。江戸時代末から羽茂では自家用味噌が作られ、麴屋もあり、田圃（米・稲わら）、畑作（大豆）、山林（味噌樽）、竹林（たが）など原料、資材がそろっており、大工、樽職人の伝統もあった。羽茂川のお陰か、清水も豊富、移出用の港・棧橋の建設など自然環境もよく、船は輸送費も安く、資本主義経済の導入期で工員の賃金も安い、味噌工場の立地条件としては好条件であった。そこへ気温が低く味噌製造のできない北海道の発展が移出に拍車をかけたのである。佐渡ヶ島及び味噌業界での法人登録の第1号や、島内の佐渡味噌同業組合の事務所の設置が羽茂であることを考えると当時の隆盛ぶりがうかがえるというものである。

羽茂の文化面について一寸ふれると、町誌によれば江戸時代前期にすでに立華様式の花があり、1786（天明6）年池の坊花伝書がのこっている。また羽茂のみに伝わる弧蓬遠州流は幕末に伝わったものだそうである。落城生き残り古武士によって守り続けられた剣術は一波流、柔術は唯心流、片山心働流などが伝わっている。連歌は1628（寛永5）年菅原天満宮再建、祈祷連歌が文献上初出であるが、その後月次連歌として1900（明治33）年まで継続された記録がある。

〈1868（明治元）年佐渡奉行所、佐渡裁判所を廃し佐渡県を設置する。〉

先に明治へのいぶきと記したがこの文化がそして、維新の変革が暇修庵舎へとつながる。葛西周徳の子周禎は1869（明治2）年正月、暇修庵舎の建白書を、佐渡県民政方役所に

着任して間もない参謀兼民政方奥平兼輔に提出し、許可。3月に布告された。佐渡で最初の洋式の教育法を加味した半官制の庶民教育・郷学所ができたのである。尚、ほぼ同じ時期に相川、新穂にも郷学所ができています。3年後の1972（明治5）年〈前年佐渡県から相川県に〉学制が発布されたのに応えて郷学校と改称。教育内容を国の基準にあわせた。

この年、寛永以来の田畑の売買禁止が解かれた。1875（明治8）年税法が地祖に改められた。富国強兵策の一環として増税はさけられず。小農たちは苦しくなり、豪農、豪商の手に多くの田畑が渡った。佐渡でも国仲では50町歩を超える地主を生んだが、羽茂はそれが出来なかった。住民の生き方もあろうが、理由の一つに氏江元彦が稲扱機の利益で、官林の払い下げをうけ、開墾して窮民を住ませたり新しく鍛冶の事業を起こして生活を助けたりしたからだと言われている。

先に羽茂が江戸時代の苦しい低水準であり格差のない社会、お互いに助け合いながらも平均化されていたことを述べたが、このことは今も伝わっていると考えるとよいのではないかと。功利を求めず、おっとりして文化的である。と評価されるかと思うと、また、覇気がない、苦学力行する気骨もない、故郷に錦をかざる人も少ない。などとも言われている。

1876（明治9）年相川県が新潟県となり、県に属する私立小学校はみな公立の小学校となった。葛西周禎はそれに伴って暇修庵舎を閉じ自宅で懐新塾を開いた。そこで学んだ一人にヤマカ味噌を興した葛西幸太郎がいる。また周禎と円山溟北の学古塾で同門、竹馬の友であった美濃部禎は1875（明治8）年、度津神社の宮司として赴任、美濃部塾を開いた。昭和になって周禎の子、千秋は校長職のかたわら（千秋）懐新塾を興した。千秋は10歳で上京、その後東京高等商業学校（現一橋大学）卒業、福島高等商業学校教授、文部省教学局指導部長を歴任。満蒙開拓青少年義勇軍募集などにも努力したといわれる。1941（昭和16）年退官、村立羽茂農学校長に迎えられ、文部省の勅人教学官だったため校長取り扱いであったとか。

1890（明治23）年小学校令が改正され修業年限を尋常科は3ないし4年に高等科は2ないし3年とした。そしてこの年、教育勅語が発布された。〈1897（明治30）年1200年弱続いた、雑太・賀茂・羽茂の三郡の合併が施行され、佐渡郡となった。〉

1907（明治40）年義務教育の修業年限は6年に延長され、高等科は2ないし3年となった。羽茂尋常高等小学校は翌年より尋常科6年高等科2年となった。

1893（明治26）年に制定された実業補習学校規程にもとづく羽茂実業補習学校が1909（明治42）年小学校に付設された。実業補習学校は小学校教育の不足を補うため義務教育課程を終えた者を対象に本来は夜間授業で農・工・商業などの産業教育が目的だった。即ち中学校、実業学校などに進学できない勤労に従事する青少年の教育機関として設けたものでした。ところが羽茂は当初入学資格を高等科2年卒業者とし、学科は普通科目の修身、国語、算術のほか農業科目として水稻栽培、麦作試験（ママ）、蔬菜栽培、養蚕、果樹などと、実習であった。しかし1916（大正5）年に至って学則を変更し入学資格を義務教育卒業者にもどした。この実業補習学校はそれなりに定着してきた。

1926（大正15）年青年訓練所令及び青年訓練所規程が公布された。実業補習学校は職業に就いている青少年にたいする実務教育機関であったのに対し青年訓練所は実業補習学校とは性格を異にし、16歳以上の男子を対象に4年課程の軍事教練に重点置いた入営前の青年教育であった。訓練修了者は徴兵時の在営年限を半年短縮された。軍事教練は教科目と同時間で、4年間400時間であった。羽茂では「羽茂青年訓練所充用羽茂農業補習学校」

を羽茂尋常高等小学校に併設した。国からはきわめて少額の予算が配分され施設費にも苦勞したと言われる。

明治以降、味噌産業が栄えたとは言え、羽茂の基幹産業は相変わらず農業であり、就業人口は農業が多かった。それに味噌工場に働く工員は小木、赤泊、西三川などからも来ていたし、第二次大戦中男子が出征して労働力が不足すると、女性中心のキンポウ隊（勤勞奉仕隊）が海府からさえて来ていた。それは戦後一時期まで続いた。

農村羽茂は明治、大正と時代が進むなかで実業補習学校がそれなりに成果はあったのであるが、村として組織的に成果を上げるところまで行っていなかった。戦争景気も届かず米価が低迷するなか羽茂村は1917（大正6）年土地改良などの「羽茂村是」を定め農業立村を打ち上げた。これはその後の村の進路決定の大綱となった。

昭和に入ると、1928（昭和3）年「羽茂村農業是」を制定した。前述のように金融恐慌、昭和恐慌。そして1931（昭和6）年満州事変勃のあおりを受け、経済的にもきびしく翌年、農林省の経済更生指定をうけ、1933（昭和8）年「羽茂村経済更生五カ年計画」をたてた。これは経済更生運動であると同時に精神更生運動であったと言われている。わずかな補助金と低利資金の貸し付け、救農土木事業を行い更生させることでもあったが、村、集落、隣保を共同で活動させようとする目的もあった。これは軍部の台頭による戦争準備への精神更生運動の一つであり、どんどん軍国主義化していった。羽茂村は村の更生のため国の政策に乗ったのである。ただ、その「農業是」の推進と「五カ年計画」の実践の中から今の羽茂があり、「八珍柿・おけさ柿」が作られたのである。

やがて1937（昭和12）年蘆溝橋での衝突・日中戦争から太平洋戦争へと突入していった。

IV 人づくりと羽茂高校創立

羽茂は農業を基幹産業として村づくりを進めていくなかで当時村長であった本間瀬平は「村づくりは人づくり」と考え中等学校の設立に奔走した。

当時の羽茂から中等学校への進学率はたいへん低かったのである。

郷村を出でて佐中に学ぶものひとりかふたりなりしあのところ

藤川忠治が1953（昭和28）年に詠ったもので、歌集『かりばね』に載っている歌である。1901（明治34）年生まれの彼が佐渡中学に入学したのは1914（大正3）年で、卒業は1919（大正8）年である。羽茂出身の在校生は彼が入学したとき、4年生、5年生に各1人であり、彼が5年生になったとき3年生1人、2年生2人、1年生1人であった。藤川忠治は『歌と評論』主宰、戦前、法政大学などで講師。戦後、羽茂高校教諭としてしばらく教壇にたたれた。当時の歌

落梅集誦しみてかなしいいきとふとよみかへるバイブルの句など

が碑となって校庭に建立されている。その後信州大学教授など歴任。彼は羽茂から初めて大学（東京帝国大学）に進学した人であった。医専など専門学校をでた人は一、二人、いたが

大学進学は初めてだったのである。ちなみに羽茂名誉町民になられた葛西嘉資は藤川忠治の5年後に生まれ、羽茂小学校卒業後、東京府立第三中学校へ進学した。その後東京帝国大学卒業、厚生省事務次官、日本赤十字副社長などを歴任した。

佐渡中等学校別卒業生数の表を見て頂きたい。佐渡に初めて佐渡中学ができて第1回の卒業生を送ってから40年間、島内の中等学校の卒業生数と羽茂、赤泊、小木出身者のそれぞれの学校の卒業生数を表にしたものである。これを見ると、当時、中等学校は国仲と相川にしかなく、いかに南部の子弟にとって進学が困難であったか。そして羽茂は味噌産業が栄えたとはいえ、職人や工場勤め人の子弟には進学を考えることはできなかった。現在ほどバスも発達してなく、国仲の学校に通うとなると、下宿しなければならない。そのような経済的余裕はなかったのである。さらに昭和になって、先に述べたように経済の不況に15年戦争への突入は庶民を苦しめ進学をますます困難にしたのである。

1934（昭和9）年当時、佐渡では補習学校30校、青年訓練所30校となっていた。そして中等学校は6校で在校生は佐渡中学校（425人）、相川中学校（190人）、河原田高等女学校（353人）、相川実科高等女学校（132人）、佐渡農学校（男268、女125人）佐渡高等女学校（274人）であった。

本間瀬平が人づくりにこだわったのはこの現実だったのである。地元で中等学校がほしいとの願いは村民の心のなかに温められていた。その願いは経済更生運動のなかで改めて問い返され、本間瀬平は夢の実現の先頭にたった。1931（昭和6）年に村長になった彼は、将来を見こして専修農学校の校舎建築の基本金を積み立て始めている。そして1934（昭和9）年、羽茂村議会は実業補習学校と青年訓練所を統一した形の羽茂専修農学校の設立を決議した。同年、県の設立が許可され、10月30日に開校した。ところが翌1935（昭和10）年4月1日、青年学校令が公布され、それに乗っかる形で同月5日、専修農学校本科（全日制）を開校した。そして同月8日羽茂小学校を仮校舎として開校したのである。さらに翌年の1936（昭和11）年3月25日羽茂農学校（乙種）が認可された。町誌に「専修農学校は実業補習学校規定によって、県の設立認可をうけて開校し、翌春は法改正により青年学校令による専修農学校となり、その翌年は全日制の農業科は実業学校令による乙種農学校へ、定時制部分は青年学校に分離したのであった。それにしても、この制度の変化を予知していたかのような、たくみな展開であった」とある。

当時、実業補習学校と青年訓練所を統一して青年学校と改称し内容を充実して農業専修学校を設置したのは羽茂と河崎村であったが、河崎村は数年で止めてしまった。実業学校令による学校までたどり着いたのは羽茂村であった。

1937（昭和12）年羽茂農学校は第1回卒業生76人を出したが、そのうち75人が羽茂出身であった。また羽茂出身者でこの年、他の中等学校卒業生は佐渡中学校2人、河原田高等女学校2人、佐渡農学校男子二部2人、と大きく様変わりし、羽茂の進学率は上がった。この人づくりは村長の指導力と村民の努力の結果、成功をおさめた。しかしその裏には羽茂村一丸となってこれから後、20年になんなんとする困難な財政状態にたえなければならなかった。

専修農学校設立決議の段階から議会では財政負担で賛否両論激しく論じ合った。がしかし決議は満場一致でされている。それは内務省の特別許可をうけて、制限外の税負担をしても専修農学校を建てよう。ということになったのである。予算書でみると、税としてすでに9,921円の徴収。さらに3,400円を追加徴収する。次ぎに基本金から14,800円をとり

くずして使用するなど。この年は県からの補助金はまったくなく、開校すれば維持費、教職員の給与費も必要であったし、勿論、校舎建築が必要であった。

先述のように昭和恐慌、農村不況そして満州事変勃発、さらに羽茂村としては経済更生五カ年計画を受け入れたときである。先人達はその苦しい経済のなかで、専修農学校の創設は経済更生より以上に人間厚生、青少年の教育が重要だと考え、不況だからこそ教育による立村を決意したのである。先人達は「米百表」の故事に負けない厳しい決断をしたのである。

校舎は1935（昭和10）年に竣工、7月1日落成式を挙げた。作業場、畜舎、肥料舎の附属建物は翌年にかけて一応整った。さらに7年後に敬神道場が建てられ体育の授業にも使用された。それまでは朝礼は小学校への渡り廊下、体育は小学校の体育館をかりての授業であった。苦労は村だけでなく、生徒も明るい希望のなかで厳しい船出だったのである。その後1947（昭和22）年県に移管されるまでは村の財政には大きな負担になった。軍事教練に狭いと言うことで、同窓会・生徒の勤労奉仕でグラウンド（今の羽茂中学のグラウンド）をつくり、敷地を寄付した。県への移管のさいは県立高校水準の設備が必要であるとして各集落への税外寄付金の割り当てや一般寄付で100万円を集め、いわゆる持参金をもって県立になったのである。勿論、財政面だけでなく当時厚生省社会局長葛西嘉資はじめ多くの人々の運動、協力があって県への移管が成功した。しかし、その後も、創立当時の校舎（今の羽茂中学校の敷地）から寺田道をはさんで移転（今の羽茂農協の敷地）するため、六期にわたる新校舎や附属施設の建築をしたときも地元負担が必要であった。

この県に移管された年、学制改革により六・三・三制の新制度が実施された。そこで新制中学校の校舎が必要になったが校舎建築ができなく、県に移管されたばかりの県立羽茂農学校に併設中学校をつくり卒業させた。そのため、羽茂中学校としての第一回の卒業は他の町村より一年遅れている。体育館などはその後10年も小学校と共用だった。中学生が体育館を使用しているとき、小学生は小さくなっていた。

〈1948（昭和23）年羽茂農業高等学校、翌、1949（昭和24）年普通科を併設に伴い羽茂高等学校と改称し現在に至る。〉

このように羽茂高校は地元で経済的負担ばかりか大きなしわ寄せを強いた。だから今でも、住民は自分たちが建てた「おいらの学校」と親しみの感情をもっているのである。

県立高校になってからも学科廃止や学級減問題などが起こるたび強力な存続運動があり、そのつど地元町村当局、同窓会、PTA、住民の協力により、今まで存続、発展してきた。

振り返って見ると、この70余年の歴史は平坦なことはなかった。そして、佐渡が1市になり過疎、少子化が速度を速めている現状は、羽茂高校の将来に大きな危機的問題を投げかけている。だからこそ羽茂高校の存続発展のため、創立当時の先人の情熱と厳しい決断に学び、大運動が必要ではないかと考える。それには同窓生がその先頭にたって運動を進めて行かなければならないのではないかと、そのための参考にしていただきたいとの思いで申し上げた。

（2009・4・29・新潟羽高会での講演）

主な参考資料

『羽茂村誌』『羽茂町誌』『小木町史』『赤泊村史』
『真野町史』『両津市誌』『羽茂高等学校五十年史』
『羽茂農協30年のあゆみ』『羽茂小学校百年誌』
『小木小学校百年のあゆみ』『赤小の百年』
『マルダイ味噌百壺年史』『ヤマカ味噌醸造業の沿革』
『佐渡四民風俗』『佐渡志』『佐渡国誌』『佐渡大観』
『自叙伝』河上肇
『河上肇』大内兵衛
『学問と思想と人間と』有澤廣巳
『ワイマール共和国物語』有澤廣巳
『ワイマール期ベルリンの日本人』加藤哲郎
『モスクワで粛清された日本人』加藤哲郎
『理性ある人びと力ある言葉』ローラ・ハイン

本文注

- ① 1950年高校進学率、42.5%、1952年新制大学第1回入試当時の進学率は10.3%

I 創立前の近代日本

- ① 君主が制定した憲法。プロシヤ憲法を参考にし伊藤博文、井上毅などが中心に制定、その過程では国民に一度も公表せず発布した。その内容は天皇主権、天皇に対し神聖不可侵であり、天皇は統治権を総攬し、陸海軍の統帥権があり、基本的人権は臣民の権利として制限されていた。それでも無知の国民はアジア最初の憲法として提灯行列をして祝賀した。これに対し国民が制定した憲法を民定憲法という。日本国憲法がそれで国民主権であり、人民が歴史のなかで勝ち得た基本的人権は不可侵で永久の権利と規定され、法の下での平等、選挙権の平等、男女の平等、生存権などが規定されている。ことに前文と九条の戦争放棄、戦力不保持、交戦権否認は世界で初めての憲法規定であり、誇りである。
- ② クレマン・ジュグラー（1819—1905）フランスの医者、経済学者。景気循環について研究。後に経済学者ヨーゼフ・アーロイス・シュンペーター（1883—1950、オーストリアの経済学者）によってジュグラーの波と名付けられた。
他に約40ヶ月周期循環のキチンの波、約20年周期循環のクズネッツの波、約50年周期循環のコンドラチェフの波の説もある。
- ③ 明治憲法下の刑法で天皇などに危害を加えたり、加えようとした罪、大逆罪。戦後削除。
1910（明治43）年5月25日、社会主義者宮下太吉ら4人の明治天皇暗殺計画が発覚。即ち信州明科爆裂弾事件が起きると、これを口実に社会主義者、無政府主義者を根絶やしにするため政府が主導し政治的でっち上げられたとされ、数百人の社会主義者・無政府主義者を逮捕・検挙した。検察は26人を天皇暗殺計画容疑として起訴。異例の速さで翌年1月18日死刑24人、有期刑2人の判決がだされた。1週間も経たない1月24日、幸徳秋水ら

11人、翌25日、管野スガが処刑された。特赦無期刑で獄死5人、仮出獄出来た者7人であった。幸徳秋水も今は復権し四万十市の丘に辞世の詩碑が建立された。裏面に塩田庄兵衛により「時の権力によって大逆事件の首謀者に仕立てられ、絞首台で平和と民主主義のための闘いの生涯を閉じた」とある。

- ④ 『貧乏物語』はヨーロッパ留学中イギリスでみた貧乏対策を参考に書いたもので、日本人が書いた最初の経済学的著作と言われ、当時のベストセラーであった。ただ、マルクス経済学にはほど遠い。河上は『貧乏物語』後、マルクス主義の追求を進め、『貧乏物語』を絶版。『資本主義経済学の史的発展』を著す。それを教え子の櫛田民蔵に批判され、「一本参った、〈略〉出直して、是が非でもマルクス主義の神髓を把握してやろう、と決意」。「40より50に近い方の年齢」になっていたにもかかわらず、さらに真のマルクス主義を追求する。このときの短歌「旅の塵 はらひもあへぬ我ながら また新たなる旅に立つ哉」。京都帝大教授を辞し、実践活動へ。マルクス主義経済学者として『第二貧乏物語』『資本論入門』を著す。共産党に入党し獄につながれ、非転向を貫いた求道の戦士。
- ⑤ ドイツのワイマール共和制期に、社会主義・共産主義研究が勃興した。その時期、留学した人々で、戦中、逮捕・拘禁され大学を追われ、戦後は社会主義の理論のリーダーとなった者が多い。たとえば学問・思想の弾圧をうけた森戸事件の森戸辰男、櫛田民蔵。高野岩三郎、大塚金之助、堀江邑一、平野義太郎、大内兵衛、有澤廣巳、向坂逸郎、宇野弘蔵、美濃部亮吉など、また国崎定洞のようにドイツからソ連・モスクワにわたり、陰謀のためスターリンにより粛清された者もいた。
- ⑥ 戦時体制になると国体論にもとづく思想統制が徹底し社会主義・自由主義思想まで弾圧がされた。矢内原忠雄が大学を追われたり、大内兵衛グループがでっちあげられた人民戦線事件で検挙される事件などが起こった。

II 明治以前の南佐渡

- ① 佐渡を三郡に分かけた頃の境は定かでないが『倭名類聚抄』に羽茂郡は9郷（高山寺本7郷）、雑太郡8郷（高山寺本4郷）、賀茂郡5郷（高山寺本6郷）とある。江戸時代になって『佐渡志』に倭名類聚抄の記述を紹介したのち「明暦元年（1655）ニ至リ国司伊丹蔵人勝政、郡境ノ混乱ヲイタミ、始メテ三郡ノ境ヲ改メ定ム、羽茂郡ハ、洩手村ノ上小川内川ノ川上、ソウトリ白木ヶ尾一盃清水逆サマ柳、前浜ハ松ヶ崎村ト岩首村トノ間外倉ノ橋迄ヲ以テ雑太郡ノ境トシ」とある。
- ② 佐渡小木町史の『御廻米積船取極帳』（1847・弘化4年）に佐渡各地の船主と船の石数の表があるが、一番大きいものは松ヶ崎久左衛門の740石積み、二番目も松ヶ崎の茂右衛門の610石積み、三番目が多田の七左衛門の560石積み、四番は540石積みで5艘、宿根木の市三郎がその内の1艘の船主である。佐渡の千石船はあったのだろうか。
- ③ 同町史で1876（明治9）年から約10年の養女の資料を見ると、小木に養女としてもらわれてきたり、寄留している人たちは約400人に及んだが、その内3割は相川鉦山がさびれ、生活に窮し小さな子どもを小木に養女にだしたのである。この養女は昭和まで続き「小学校では午後になると女生徒が習いごとに行くといつて、学校を早引きして困る〈略〉数百年におよんで、経済のかなりの部分を遊女、料理屋稼ぎに頼った小木としては、仕方がなかったのかも知れません。」とある。入籍から一人立ちした年齢は16歳前後が最も多い。

- ④ 江差文化センター前に大きな記念碑が建立されている。赤泊に生まれ、北海道で成功した松沢伊八を顕彰したものである。15歳の1849（嘉永2）年、田辺九郎平と松前稼ぎに江差に渡り武部喜八郎の世話で呉服商川端武右衛門に奉公。1866（慶応2）年独立、一時挫折もあったが古着屋からはじめ呉服商で成功。中国輸出、魚油産業、開拓事業にも尽力、1889（明治22）年、北海道汽船会社設立、しかし2年後持ち船が沈没、死者254人。私財を投入して救済にあたったという。1893（明治26）年没。
- ⑤ 赤泊港改修をした人は田辺九郎平といい、1831（天保2）年生まれ、18歳のとき松沢伊八と共に江差へ、武部喜八郎の店で4年勤め、独立して反物の行商を始め、それで得た資金で店を開き漁業や金貸しで成功。50歳をすぎて帰郷を考え、出入りの魚業者に2,920俵、あわ200かます、漁具いっさい、貸付金8万円を与えた。1886（明治19）年帰郷。佐渡に帰ると、私財を投げて港の改修に尽力し、また小学校の基本財産や寺社への寄付など、篤志家であった。今も港に修築の石積みがのこる。1902（明治35）年没した。赤泊港に記念碑がある。
- ⑥ 佐渡奉行石谷清昌備後守の命によって在方役高田久左衛門備寛が編集し、のち、1840（天保11）年、同奉行川路三左衛門聖謨の命によって広間役原田次郎右衛門久通が追加したものである。1750（寛延3）年、佐渡260カ村の代表本間太郎右衛門らが悪政28カ条を幕府に訴え、翌年、時の奉行は免職など役人、農民双方に処罰者がでた「寛延の騒動」といわれる事件があった。1756（宝暦6）年、江戸西ノ丸御目付役から着任した石谷奉行は、佐渡の実情をしり、適切な施策のため、高田備寛に調査させたものである。その後、1838（天保9）年中川善兵衛らに「佐渡一国騒動」がおき、この事件処理に着任した川路奉行も原田久通に命じて調査させ追加したものである。
- ⑦ 中川善兵衛は羽茂郡上山田村の百姓である。天保の初め頃は全国的に不作であった。幕府は巡検使を全国におくり調べさせた。佐渡へは1838（天保9）年来島、善兵衛は、島民の奉行所政治に対する不満をとりまとめ、16条の訴状にした。それは100石につき4石の口米を納めさらに5斗俵に2升の口米をとるなどの二重課税や、鑑札を与えた者のみに薬草植え付けを認めるなど商業諸統制の改善などであった。5月に来た100人を超える巡検使一行を小木まで追って訴えようとしたが巡検使は面会しなかった。奉行鳥居正房は善兵衛を捕えて獄に入れた。百姓たちは善兵衛を救おうと八幡社に集会し翌日、相川に押し寄せた。この集会の決議を相川に知らせた八幡村名主の家が打ち壊された。この百姓の動きを見て奉行所は善兵衛を出獄させた。しかし善兵衛に害を与えた小木の間屋に仕返しの声が群衆にあり、善兵衛の制止も聞かず先ず小木で、これを契機に各地で打ち壊しが起きた。8月、高田藩の出動となり。善兵衛たちを逮捕。翌1839（天保10）年3月江戸に送られた。奉行所の役人5人は禁錮、善兵衛以下18人は全て獄中で病死と云うことになっている。35歳没。
- ⑧ 氏江市左衛門元彦は1807（文化4）年、羽茂本郷に生まれる。代々鍛冶を業とした。20歳の頃江戸に出て刀工の修業をつみ、帰郷後、千歯稲扱機の生産に乗り出し、職工数10人の工場を設け、製品は関東、東北、羽越、へも販売した。公共事業にも関心をもち羽茂川河口付近を埋め立て土地を造成し、また脊ノ尾山の官林を払い下げをうけ開墾し、20戸余りの村をつくった。
- 1887（明治20）年80歳で没。

（2010. 3.新潟羽高会の講演に加筆）